

座安 浩史 提出 学位申請論文（課程博士）

『ウチナーヤマトゥグチの研究』 審査要旨

論文内容の要旨

「序章」では、本論文の研究の目的と研究方法について述べる。まず、先行研究を整理して「ウチナーヤマトゥグチ」の定義を整理する。

第一章では、調査地点である沖縄本島中南部方言に属する豊見城市^{うえた}上田方言と、南琉球八重山方言圏に属する石垣市方言の音韻の記述を行う。

第二章では、上田方言と石垣市方言の助詞用法について記述する。学校文法の文法的枠組みをもとに、形態が本土方言に類似するものを中心に、格助詞、副助詞、係助詞、終助詞の主な形式と用法を挙げ、上田方言の助詞の用法を老年層と若年層について記述する。年層の比較の結果、若年層には、終助詞に伝統的な方言に近い語形や用法がみられること、終助詞や文末表現に、伝統的方言の特徴が継承されやすいことを指摘している。

第三章では、「ウチナーヤマトゥグチ」の「カラ」の用法について、上田方言と石垣方言について老年層と若年層の記述を行う。「カラ」は、共通語の格助詞「で」の〈手段・道具〉、「を」の〈動作の行われる場所〉、「に」の〈動作の到達する所〉の意味に対応する位置と意味で現れる。共通語の「で」「を」に対応する、上田方言と石垣市方言「カラ」は伝統方言の用法が干渉した用法が存在する。また、共通語

「に」に対応する「カラ」には、「ウチナーヤマトウグチ」独自に派生した用法があることが明らかにした。

共通語「で」に対応する、移動の手段を表す「カラ」は、「ウチナーヤマトウグチ」では移動の手段として使う対象が「自分が運転するかどうか」という点に基づいた使い分けが観察された。伝統的方言においては、このような使い分けは観察されないから、この使い分けは、「ウチナーヤマトウグチ」の新たな用法であると解釈できる。また、この用法は、地域差と年代差があることを指摘した。

「を」と「カラ」との間には、「道カラ歩いている<道を歩いている>」のような用法がある。これは、対象が自分の側から離れたソトにある場合「カラ」が用いられ、自分に近いというウチにあたる場合は、「道オ歩いている」という。これは老年層において観察され、内間(2011)に指摘される、琉球方言における「ウチ・ソト意識」の重要性を示唆するものである。「心理的距離」を示す「ウチ・ソト意識」が、「物理的距離」というより具体化された形で現れていると考えている。

共通語「に」に対応する「カラ」(肌に直接身につける場合でも、「上カラ着る」「下カラ着る」)の用法が「ウチナーヤマトウグチ」として特徴があることを首都圏方言話者のアンケート調査で明らかにした。

第四章では、共通語と同じ形式の係助詞「は」「も」の前に付く「ガ」を取り上げ、上田方言と石垣市方言での用例を比較した。「ガは」「ガも」は上田方言では観察されるが、石垣市方言では観察され

ず、地域差があることを明らかにした。また、伝統的な方言を直訳的に置き換えたために現れた用法であると考えている。

上田方言においても、「ガは」「ガも」が老・中年層に使用されるが、若年層では用いられないことから、若年層の「ウチナーヤマトウグチ」が、より全国共通語に近づいていることがわかる。共通語の格助詞「が」に対応する形式は、琉球方言圏内でも地域差が大きく、この形式の分析が「ガは」「ガも」の解明に関係がある事を指摘した。

第五章では、格助詞に後接する「ガ」の用法について分析した。石垣市方言に観察される。次に、この「ガ」が伝統的な石垣市方言の助詞duの用法を共通語化したことで生まれたものである可能性を、伝統的な石垣市方言との対応関係から述べた。また、「ガ」が付くことで〈強調〉を示し、「他の物ではない」意を表わすことから、石垣市方言duと意味用法でも対応しているとする。この用法は石垣市方言では全世代で使用されており、石垣市方言のウチナーヤマトウグチとして定着すると予測している。この現象は上田方言では観察されず、前章の「ガは」「ガも」とは異なるタイプの地域差であると予測する。

ただし、琉球方言の助詞duが「ガ」の由来とするには伝統的方言の地域差だけでは説明ができないこと、duが「ガ」という形態で現れるとすれば、音対応が成り立たないことなど多くの課題が残っている。

第六章では、「ウチナーヤマトウグチ」の終助詞「サー」「ネー」「ハズ」の用法を記述する。これらの用法には世代差や地域差は観察されず、琉球方言圏全域で使用される可能性がある。「ウチナーヤマ

トウグチ」で「サー」が用いられるのは、共通語「さ」との形式の類似があるからであろうが、用法において、上田方言／sa／及び石垣市方言／saa／は共通語「よ」に対応する位置に現れ、意味用法も「よ」に近い用法が観察される。しかし、「ウチナーヤマトウグチ」の「さ」は、共通語の用法にはない柔らかい表現として用いられる点が異なる。

次に、「ハズ」も共通語「はず」に形態として対応する琉球方言／hazi／に基づく。「ハズ」は共通語「だろう」に対応する位置に現れるが、共通語「はず」のような強い推定の意味はなく、根拠が稀薄な場合に用いられる。

「ウチナーヤマトウグチ」としてよく知られる終助詞「ネー」は、上田方言／hii, 'jaa／、石垣市方言／raa , sooraa／が共通語「ね」に対応する位置に現れ、意味も類似するが、対応する形式が共通語にない。伝統的な方言に、音韻的に対応する語形がないという点で「サー」「ハズ」とは異なる。意味用法はも共通語「ね」とは異なり、伝統的方言を共通語に直訳した結果である。

第七章では、「ウチナーヤマトウグチ」のアスペクト形式、「～シテアル」・「～シヨッタ」形式について分析した。この形式は上田方言と石垣市方言の全世代に観察された。

これらの形式は、伝統的な琉球方言の用法を共通語に置き換えたことによって現れたもので、共通語直訳としての「ウチナーヤマトウグチ」としての特徴を有している。また、上田方言と石垣市方言のどちらにも世代差がある事が確認された。

終章では、ここで取り上げたウチナーヤマトウグチの世代差や地域

差を中心にまとめ、今後の課題を挙げている。

論文審査の結果の要旨

琉球方言は日本語の中で唯一同系統である事が証明された方言で、本土方言と対立する最大の方言である。琉球王朝が成立して琉球文化圏が確立し、その後、本土方言との差が広がったと考えられる。伝統的琉球方言の研究だけでなく、現在の琉球方言の状況からも有益な示唆を与えてくれる。

明治初、日本政府は琉球を沖縄県として日本の一部と位置づけ、明治13年（1880）、『沖縄対話』という琉球方言と共通語（普通語）の対訳書を刊行して、日本語の普及をはかった。以後、琉球方言では義務教育と通して普通語が教育され、多様な場で共通語のとの接触が行われてきた。その間、アメリカ軍の占領や沖縄返還と大きな政治的变化を経験しながら共通語との接触が続き、今では沖縄県の住民は日本語と琉球方言のバイリンガルの人が大半となった。一方、若年層では伝統方言を受け継がず理解できない人も増えていて、沖縄方言はユネスコの消滅危機言語に指定されている。

奈良時代以前に日本語祖語と分岐したとされる琉球方言は、本土方言との差が大きいだけでなく、島毎、さらに集落毎に方言体系が異なる。音韻・アクセント・文法・語彙の体系の差異はもとより、今は失われた士族と平民の身分による言語差、年代差、男女差による親族呼

称や敬語という社会言語学的な差も大きい。このような多様な琉球方言において共通語との接触が一色でないことは明らかである。

本論文は、このような複雑な様相を保持する現代琉球方言の上に成立した「ウチナーヤマトゥグチ」の本格的な研究である。

申請者は、「ウチナーヤマトゥグチ」を先行研究を検討し、伝統方言に共通語が覆い被さったことばであるとした上で、「ウチナーヤマトゥグチ」の文法面で世代差と地域差があることを、豊富な具体例を基に証明する。調査方法は手堅く、調査地点に赴き飛び込みで見つけた各地の生え抜き話者からの聞き取り調査である。

ここで申請者は、従来の指摘の他に「ウチナーヤマトゥグチ」が、沖縄方言話者が共通語と思って使っている共通語（地域共通語）であることを指摘する。卓見である。「ウチナーヤマトゥグチ」は公の場で用いられるよそ行きの地域共通語であり、伝統方言を受け継がない若年層では、この他に新沖縄方言とでもいべき生活語があり、それで日常の言語生活が営なまれていることを視野に入れている。本土方言でも各地で共通語化が進み伝統方言が失われているが、やはり日常の言語生活では共通語の影響を受けた伝統方言が行われている。この視点からの考察は新鮮で優れている。

「ウチナーヤマトゥグチ」研究の中で、とりわけ文法の意味用法の記述研究、助詞・助動詞の研究は、困難を伴う。助詞や文末詞のデリケートな意味用法の分析や、ネイティブスピーカーによる例文チェックと考察は、自由に文が作れる琉球方言の話し手の研究者の独壇場であると言っても過言ではない。その点でも、申請者はその条件を備え

ている。

次に、社会変動に着目し世代設定から分析考察を行っている。一般に、年代差は社会的な通念で、老・中・若年層に分けられる。本論文では、伝統的方言が生活語であった世代を老年層、本土復帰前に言語形成期を終え伝統的方言がある程度理解できる世代を中年層、伝統的方言がほとんど理解できない本土復帰以後生まれた世代を若年層とする。そのため、中年層が63歳～53歳と分類される。これは、一般的な分類とは異なるが、言語の実態を適切に分類することができる優れた視点である。

本論文は、調査地点の音韻体系の記述がある。音声言語である琉球方言研究には、この音韻体系の記述が必須である。ただ、ここでは音韻対応に主眼が置かれていて、個々の音声実態についての記述が手薄になっている点が惜しまれる。音韻面でも「ウチナーヤマトウグチ」の地域差と年代差が指摘できたと思われる。

上田方言と石垣市方言における一連の助詞の詳細な分析と記述については、平成26（2014）10月、第99回日本方言研究会（於：北海道大学）で発表し、学会での評価を受けた。この中で、「ウチナーヤマトウグチ」の助詞の意味用法に沖縄本島方言と南琉球方言とに差があることを初めて指摘した。「ウチナーヤマトウグチ」の地域差を指摘した研究は少なく、優れている。平成27年（2014）8月、ブラジル国サンパウロ大学で行われた、国際語としての日本語に関する国際シンポジウム（EJHIB2015）で発表をし、最優秀発表賞を受賞しており、研究成果は対外的にも評価は高い。

申請論文では、文法的カテゴリーを学校文法に依拠しているため、琉球方言独自の文法特色を記述しきれていない点が惜しまれる。本土方言の研究者に説明するために共通語の文法を用いるのはやむを得ない手法であるが、方言独自の適切な方言文法カテゴリーの開拓と分析法が期待される。また、琉球方言全体に横たわるアガーミとワッターの世界からの文法記述のさらなる深化が待たれる。アガーミとワッターの世界は奄美大島を含む琉球諸島に広がる世界観で、「自分を含む我々」、「自分を含まない我々」という世界である。「心理的距離」、「自分で動かせるかどうか」等による助詞の選択も、アガーミとワッターの世界が関与していると捉え直せば解釈できる点が多いのではないか。

今回は、語彙、表現についての考察がなかったが、今後の研究が期待される。また、本研究は日系ブラジル人の沖縄コロニアに於けるコロニア語との比較等の日本語が本格的に外国語と接触混交した現象を探る対照研究も可能で、グローバルな世界を視野に入れた研究として今後の研究が期待できる分野である。

本論文はさらに考察を深めるべき点があるが、危機言語である琉球方言を記述言語学的手法に社会言語学的視点を加えて考察したユニークで優れた「ウチナーヤマトウグチ」研究であり、博士（文学）の学位を授けるに相応しい論文と認めるものである。

平成28年2月15日

主査 國學院大學教授 久野 マリ子 ⑩

副査 國學院大學教授 諸星 美智直 ⑩

副査 國學院大學教授 吉田 永弘 ⑩

副査 岩手大学教授 大野 眞男 ⑩

座安 浩史 学力確認の結果の要旨

下記四名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、
博士（文学）の学位を授与される学力があることを確認した。

平成27年12月22日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	久野	マリ子	㊞
副査	國學院大學教授	諸星	美智直	㊞
副査	國學院大學教授	吉田	永弘	㊞
副査	岩手大学教授	大野	眞男	㊞